「よし、これで集中できる。」
私は慌てて机にむかった。

土曜日、今日も同じように机に向かい勉強を始める。しかし今日も集中できない。外から聞こえる騒音が気になって仕方ない。どうすればいいんだと悩んだ末、耳栓をすればいいことに気がついた。両耳に耳栓をすると騒音は聞こえなくなった。
「よし、これで集中できる。」
私は、迫る受験にむけて力を振り絞った。
「誰にも負けない」
毎日そう思って頑張ってきた。

日曜日、今日も同じように机に向かい勉強を始める。机の上も綺麗だ。本棚も整理されている。部屋も綺麗だ。ピアノの音も、時計の音も聞こえない。もう何も気にならない。耳栓をしてから気合を入れ机に向かった。
「さあ、はじめよう」
気持ちよく勉強を始めた。しかし、トクントクントクン … 完全な静寂の中から聞こえてくる音がした。トクントクン ‥ それは止むことなく一定に刻まれるリズムだった。トクントクン ‥
「うるさい !! 」
やはりその音楽は私にとっては騒音にしか聞こえなかった。
「集中できない。この音を止めたい」
そう思った私はどうすればこの音を止めることができるのか考えた。そしてしばらくの時が経った。私は床に寝ていた。全身が熱かった。トクントクン ‥ 確かにその音がゆっくりになっていくのを感じた。
「よかった。」
そう思った私は机に向かうことなくそのまま目を閉じた。そしてもう何も聞こえなくなった。

月曜日。彼は家を出る前にいつものように手帳を見る。これには彼の行動予定すべてが記されている。今日何の仕事からやるべきか、誰と会う約束になっているのか…彼の自宅、仕事場、更衣室のロッカーに至るまで、身の回りはきちんと整頓されている。かなりの几帳面な性格なのだ。それは病的ともいえる。

火曜日。彼は同じフロアで働く上司、同僚などからも一目置かれた存在である。過剰なまでの几帳面さは仕事においても同じであるからだ。いわれた仕事は自分の休憩時間をけずってまで終わらせ、営業に行く際は上司に何時何分までに社に戻るか、などすべてを報告してから出かける。そんな様子を、まわりは時に好奇の目を向けながら見ている。

水曜日。いつものように手帳に書かれたとおりに行動する。彼は自分が会社でどんな存在なのかもちゃんとわかっている。だが、彼は他人にどう思われようと気にしない。予定通りに行動することが、このうえない満足を自分に与えてくれると知っているからだ。

木曜日。彼は一人暮らしで、炊事、洗濯、すべてを自分でこなす。夕飯の買い物に出かけても、予定外の買い物をすることはまずない。年間の収入から、１日あたりどのくらいお金を使うか、おおよその計算をして手帳に書いてあるからだ。寝る時間、起きる時間、毎日がすべて同じパターンなので、羽目をはずして飲みに行くことなどもちろんない。健康的な規則正しい生活ではあるのだが …

金曜日。彼には将来設計もしっかりとある。それによると、あと１年後から自分の理想の人と交際を開始し、それから２年後に結婚することになっている。人生そううまくいくものだろうか …

土曜日。この日も会社に行かなくてはならない。いつものように始業１５分前に席につき、９時からしっかり仕事が始められるよう準備する。会社に勤めている限り、残業は避けがたい。彼もこの時ばかりは予定になくとも働く。だが、そのあとの予定にくるいがおこることがないよう、予定は組み立てられている。

日曜日。この日は人と会う約束をしていた。新宿駅で待ち合わせをしていて、約束の２０分前に着いていた。しかし、この時、偶然高校時代の同級生に声をかけられた。少し話そうと言われた。この予定は彼の手帳にはない。したがって、またあらためて、と言いながら手帳に予定を書き込もうとする彼に、その同級生は、コーヒー１杯なら１０分もあれば飲めると言って、強引に喫茶店へ

連れ込んだ。何ということか。今まで築きあげてきた何かがバラバラと音をたてて崩れていくのを感じた。その瞬間、彼はその場に倒れこんだ …

月曜日
私はいつものように大学のキャンパスへと向かう。道程の電車の中で惚れている女の子とばったり会う。サークルの話題で盛り上がった。… ハッ !! 目を覚ましたら火曜日になっていた。それは夢だったのだ。

火曜日
サークルを終え家に帰り、お風呂に入っていつものように床についた。そして夢を見た。…… 大好きな女の子と隣同士で授業を受けている。教授の話は耳に入らずしゃべり続けていた。授業終了のチィイムがなったところで目が覚めた。また夢か …

水曜日
私はバイトを終え、夜遅く家に帰った。お風呂に入りテレビを見てから床についた。…… 大好きな女の子と学食でご飯を食べている。好き嫌いの話題で盛り上がり。周りの誰も気にならなかった。ご飯を食べ終えたところで目が覚めた。

木曜日
私は授業がないので友達と買い物に行った。お昼から新宿に行き色々なところを回り、気になっていた靴と本を買った。夜ご飯はもちろん焼肉。カルビ、タン、それからピートロなど、お腹いっぱいになるまでひたすら食べひた。家に帰ると、今日買った本をちょっとだけ読んでから床についた。…… 大好きな女の子と二人でカラオケに来ていた。最近の流行の歌を沢山歌い満足したところで目が覚めた。もうちょっと夢を見ていたいと思いながら …

金曜日
私は明日に迫ったサークルの大会の為仲間と近くのグラウンドを勝手に使って軽く汗を流した。そのあとは近くのスーパー銭湯に行き明日の試合に備えて体の疲れを洗い流した。家に帰ると明日の事を考えながら床についた。…… 大好きな女の子と食事をしていた。もちろん焼肉であった。カルビから始まりタンに豚トロ、時間はあっという間に通り過ぎ会計を済ませたところで目が覚めた。次は何処に行くんだろうと思いながら … 。

土曜日
私はサークルの試合の為多摩川の土手にあるグラウンドに来ていた。周りにはすでに沢山のサークルのチームが集まっており私のチームも私が最後であった。私のチームは次々に勝ちあがり、決勝戦まで残った。残念ながら最後は負けてしまったがいままでで最高の結果を残す事が出来た。六試合を戦った為、体はくたくただった。だが、試合の後は予約していた店で恒例の打ち上げであ

る。大いに飲んで大いに騒いだ。そのせいで終電には間に合わず近くの友達の家に泊めてもらった。家に入るや否や、ベッドの上に服も着替えずに寝てしまった。……　……　……　……

日曜日
友達が彼女とデートがあるというので１０時に起こされた。疲れていたせいか夢は見なかった。友達の予定を壊してはいけないと礼を言ってすぐに友達の家を出た。朝食はもちろん牛丼である。昨日のお酒が残っているのか、とても頭が痛い。真っ直ぐ家に帰り、トイレを済ませすぐに床についた。……
　…… 寝れない。寝れない。寝れない。寝れない。目を開けてみてもちょっとテレビを見ようとしても、リモコンを押すが、テレビはつかない。不思議な事に全く眠くない。気がついてみると外は明るいままだった。ふと時計を見てみると１０時から全く進んでいないのだ。壊れているのかな。電池を換えてみる。… 動かない。近くのコンビにまで買いに行こう。… いくら歩いても景色が変わらない。前に進まない。人もいない。街灯も全くついてない。なぜだ。
　　彼は日曜日の朝。自分で目覚めずに友達に起こされた。いつも見ていた夢を見なかったのだ。それにより、一日が始まらなかったのだ。

月曜日、銭湯の帰り大きなきれいな星を見つけた。あんな星初めて見たな。と思いながら家に帰った。

火曜日、銭湯に行くといつもと違う番台さんだった。初めてみる人なのでいつもの世間話が出来なかった。その帰り道、昨日見た星を見ようと空を見上げるとその星はあった。昨日と変わらず大きくきれいに輝いていた。ふと気づくとその割と近いところに、その星に負けず劣らず大きな星があった。あれ？あんなの昨日あったっけ？と思いながら、なぜかうれしくなって家に帰った。

水曜日、銭湯にはまた初めてみる番台さんがいた。私は、『女湯がのぞけるから番台やりたい人が増えて交代制にでもなったのかな。』と思いながら一っ風呂浴びて銭湯を出た。その帰り道、今日は曇ってて星は見えないかなと思いながらも空を見上げると昨日みた 2 つの星とその隣に同じような星の、 3 つの星だけが見えた。他の星は見えない。まして月も見えない。私はそんなに光が強いのかと、なぜかうれしくなって家に帰った。

木曜日、番台さんはまた違う人だった。私は、『このスケベ野郎どもめっ。』と思いながらも一っ風呂浴びてまたいつもと同じ時間に銭湯を出た。空を見上げると星が 4 つ。大きくきれいに輝いている。宇宙で何が起こってるんだ？と思いながらも、なぜかうれしくなって家に帰った。

金曜日、やはり番台さんは初顔。私はもう毎日違う人なのが当たり前のように思い風呂へ入りいつもと同じ時間に銭湯を出た。帰り道、「今日は 5 つ星だ！」と言って空を見上げると、そのとおり大きくきれいに輝く星が 5 つ並んでいた。私は予想が的中して、なぜかうれしくなって家に帰った。

土曜日、番台さんは、いつか見たこの銭湯の経営者だった。私は、『あんなにバイトがたくさんいるんだからお前来なくてもいいだろ。』と思いながら風呂に入った。風呂から出て着替えて銭湯を出ようと番台を通るとき、「すいません！」と番台にいる経営者が私を呼び止めた。「あのぁ、大変急で申し訳ないんですが、明日番台やってもらえませんか？」と言ってきた。私は『バイトたくさんいんだろうが。』と思ったがそれはあえて口に出さず、「ひまなのでいいですよ。」と言ってあいさつをして銭湯を出た。帰り道、空には、大きく輝くきれいな星が 6 つ。私はなぜかうれしくなって家に帰った。

日曜日、今日は私が番台だ。仕事は来た客から金をもらうだけで楽ちんだ。ぼーっとして昼は終わり夜になり、いつも私が来る時間になった。『俺も一っ風呂浴びてぇなぁ。』と思いつつ、いつも自分が帰る時間になった。その 1 分

後１１：１１。まばたきを少し長くして目を開けると風景がガランと変わっていた。まるで自分は空から町を見下ろしているかのような眺めだ。『なんじゃこりゃあ!?』と思って周りを見てみると、見たことのある顔が６つ…。その顔は全て真っ白で無表情。みんな地上を見つめている。みんな生首だ。私は恐くなって逃げようとしたが体が動かない。というか体が無い…。私は全て悟った。あきらめきれないがあきらめた。他の６つの顔と同じように町を見下ろした。誰かが一人銭湯の帰り道を歩いている。こちらを見上げ何か叫んでいた。よく聞こえなかったが「今日は７つだ！」と言ったようだった。私はそいつと目を合わせた。しかし向こうは目が合っていることに気づいていないようだった。そいつは、なぜかうれしそうに家に帰った。

月曜日

… ザワザワザワ …

朝起きると昨夜からつけっぱなしで寝てしまったのか
ＴＶで何かのニュースをやっているようだ。
それにしてもこのキャスターの騒ぎようはどういうことだ??
僕は寝ぼけ眼を擦りながらもＴＶに見入る。

「先日、こちらの研究所で大発明がされました !!
なんと、光より早い物質を扱う事ができる様になったと言うのです !!
これにより、いわゆるタイムマシンというものが実現したのです !!
人類が過去より夢見ていたものが、遂に実現したのです !! 」

… 何を言っているんだこいつは。ドラえもんの見すぎで
変になってしまったのか。寝起きの僕と興奮しているキャスターの
テンションはあまりにも違いすぎて、僕はいまいち現状を理解することが
できないでいた。
しかし、そういった視聴者がほとんどだということは
おそらく想定済みだったのであろう。
そのキャスターはなんと、

「今からその装置を使って過去へ移動して見たいと思います」

と言うと、その仰々しい機械のようなモノに乗り込んでいったのだ。
‥ その直後、画面がパッと輝いたかと思うとそのキャスターは
いなくなっていた。そう、文字通り髪の毛一本残すことなく、だ。

火曜日

朝起きると昨日の事が気になりＴＶをつける。

… ザワザワザワ …

昨日と同じようにＴＶは騒がしい。何故なら、いなくなってしまった
キャスターが戻ってこない、というのである。あのキャスターは
今、どこで、何をしているのであろうか ‥

水曜日

朝、当然のようにＴＶをつける。

… ザワザワザワ …

またか。今日もまた何かあったというのか。
画面には昨日までと違い、
報道している人々の顔が心なしか暗いように映っていた。
そして、その報道者達が言っていることを要約すると、

「人がどんどんいなくなっています。」

という事だった。今現在、必死に調査をしているが、正確な
人数は把握できておらず、日本だけでおそらく千万単位の人間が
いなくなっているというのである。
… 何ということだ。”当然”あいつの仕業だろう。
しかし、僕はもちろんの事、誰にもそれをとめる事はできないのだ。

木曜日
今日もまた人が減った …

金曜日
もうＴＶを見る気も起こらない。また

「人がいなくなった」

と言っているのだろう。僕は、そして今”存在”する人々は
理解っていた。要するに、今日までなのだろう。
良くこんな質問がある。

「明日死ぬとしたら、あなたは何をしますか？」

皆スラスラと答えを言えるような質問だ。
しかし、今その時に答えたことをやっている人は
何処にもいないだろう。人というのはいつもと違うことを
するのを嫌がり、それは死の間際になっても変わらないのだ。
僕も御多分に漏れず平凡な一日を過ごした …

土曜日
僕は”多分”いなくなったのだろう。
しかし、そんな事は誰にもわからないのだ。

月曜日、わたしはいつも通り朝５時に起きる。ごみを出し、朝食の準備をする。７時に夫を起こし、８時に玄関まで送る。これが朝の習慣だ。昼間には、掃除・洗濯・スーパーへ買い物、夫に頼まれた用をすまし帰宅する。夕食の準備、お風呂をわかし旦那の帰りを待っている。これがいつものことだ。外から見たら文句ひとつ言わずやるべき事を淡々こなす、よき妻と言えるだろう。しかし、本当のところは文句を言わないのではなくて言えないのだ。

火曜日、よく寝た～。起きて時計を見ると、なんと６時３０分。夫を起こすまであと３０分しかない。ごみを出していなければ、朝食の準備も終わっていない。ごみ出しはあとまわしにし、急いで朝食の準備に取り掛かる。なんとか準備を終え、７時に夫を起こすことができた。ふ～、一安心。わたしの夫は、何事もきちんとしていないと気がすまない人なのだ。だから朝食の準備ができていないなんて事は許されないのだ。わたしは根っからの箱入り娘で世の中のことはほとんどわからない。つまり、一人では生きてゆけないのだ。

水曜日、今日はきちんと５時に起き、いつも通り夫を送り出した。いつも通りきちんと事をこなし、夫の帰りを待つ。夕食後二人でテレビを見ていると、少し耳の悪い夫がいつも通り音量を大きくした。耳が悪くないわたしにとって、その音量の大きさはいつも苦痛でしょうがなかった。しかし、いつも通り文句は言わずに我慢した。言えない…。

木曜日、夫を送り出したあと、テレビで料理番組がやっていたので見ることにした。メニューはビーフストロガノフ。前々から挑戦してみたかった料理のひとつだ。番組でやっていたことを細かくメモし、今日の夕食で作ってみることにした。なかなか難しかったが、一生懸命に作った。やがて夫が帰ってきて一緒にビーフストロガノフを食べた。その時夫が発した言葉は、まずいからもう作らないでくれだった。一生懸命作った料理をそんな風に言わなくても、と泣きたくなった。しかし泣いてはいけない。わかった、とわたしは一言夫に言った。わたしの夫への不満は募るばかりだった。

金曜日、いつも通り朝・昼と家の仕事をし、夕方になった。昨日のような失敗はできないので、今日は夫の好きなハンバーグを作ることにした。サラダとコンソメスープも作り、準備は万全だった。しかし、夫が帰って来ない。７時、８時と時間は過ぎ、夫が帰って来たのは１０時をまわった頃だった。どうやら夕食は外で済ませてきたようだ。わたしは、せっかく作ったハンバーグとサラダとコンソメスープを片付けながら、電話一本くれればいいのに、とつぶやいた。もちろん夫に聞こえない声で。

土曜日、夫の仕事が休みだから気が抜けてしまったのか、寝過ごして夫より遅く起きてしまった。夫の視線から、無言の圧力がかかる。やってはならないことをやってしまった。明日も仕事は休みだけれど、同じ失敗はできないので、今のうちから目覚ましを休日にしては１時間早い７時にセットした。

日曜日、昨日目覚ましをセットした通り７時に起きた。しかし、横に夫の姿はなかった。今日はゴルフに行く日だったのだ。急いでリビングに行くと、もうほぼ準備の終わった夫がいた。自分より遅く起きてきて、朝食の準備をしていなかったことを怒っている。不機嫌な夫を玄関まで見送った。夕方には戻ってくるそうだ。朝の失敗を取り戻そうと思い、がんばって夕食を作ることにした。メニューは、木曜日に失敗したビーフストロガノフだ。今度はおいしく作って見直してほしかったのだ。いつの間にか時計は７時をまわっていた。結局夫が帰ってきたのは、９時すぎだった。また連絡なしで、外で夕食を食べてきたのであった。ビーフストロガノフを片付けるわたしを見て夫は、それはもう作るなと言っただろう、と言った。その後、夫はテレビをいつも通りのわたしにとっての苦痛な音量で見ていた。朝から不満がたまっていたわたしは、ついに怒りが爆発し、夫に今までの不満を全部ぶちまけてしまったのだ。

　絶対に口にしてはいけない夫の不満を全部言ってしまったのだ。夫と別れること＝(イコール)わたしの人生の終わりを意味する。なぜならわたしは、一人では生きていけないのだ。わたしの人生が終わった。

僕は朝、大学へ決まった道をラジオでニュースを聞きながら通学するのが日課である。

１/８　　今日もいつものように大学へ向かっていた。ふといつも通っていた道にあったマクドナルドがなくなっていることに気づいた。それも二店舗同時に。変だと思いながらラジオのニュースを聞いていたら、なんか気になる事を言っていた。

「今日の日経平均株価 12000 円、円安ユーロ高になっています」

『あれ、昨日まではドル高と言っていたのに、聞きそびれただけか』

しかし気になって学校のパソコンで調べたらまずアメリカのことが全く検索に引っ掛からなかった。『マックといいドルといいアメリカと問題があったのか？まるでアメリカが世界から消えたようだ。』と思ったがそれほど気にせずにいつもの道を漠然と帰った。

１/９　　今日も朝大学へいつも通り歩いて向かった。いつもより早く家を出たのでその途中にあるツタヤでＤＶＤを借りようと思って入ったら、ぱっとみ数が明らかに少なくなっていた。よく見ると日本の映画しか置いていないことに気づいた。『どうしたのですか?』と聞いたが「以前からこうですよ」といわれ友達に聞いても「何いってんの。」と白い目で見られてしまった。まるで日本しかないかのようだ。また今日も不思議なことが起きた。しかし変わらずいつもの道を帰った。

１/１０　　今日もいつも通りニュースを聞いていた。ふと引っかかる話が耳に入ってきた「全国のニュースです。」といいながら関東の事件やニュースしかやっていなかった。関東は今日は大変だなと思っていたところ、更におかしな事に気づいた。全国の天気予報で関東しかやっていない。まるで関東しか世界にないかの様に … しかし自分も関東以外に何があるのかは考えられない。またいつもの道を帰った。『また変な 1 日だった。』疲れたからもう寝よう

１/１１　　今日もまた大学だ。このごろ理解できないことが続いて疲れている感じがする。大学に着いた。何か変だ。明らかに人が少ない。東京に住んでいるやつしかいない。

『今日人少なくない？』

「は？いつも通りジャン。」

『またか … 』心の中で呟いた。いや自分の頭が疲れすぎているのだ。『もとから東京しかないのだ。』今日は頭が痛いからもう帰ろう。

１/１２　　今日もまた学校だ。もはやいつものように大学に行くことしか考えられない。家を出るといつも通っている道以外何もなかった。決められたように何も考えずその道を歩くことしか出来ない。大学のあったところに大学はなかった。そしていつものようにそのまま来た道を帰った。『もう寝よう』このごろの日課だ。

１/１３　　すごく長く寝た気分だ。もう大学はないのだ。だが無意識に行く準備をしている。自分では止められない。ドアを開けるとそこにはいつものようには道はない。進むことすら出来ない。

『でも行かなきゃ…』　『何処へ…?』

月曜

　　わたしはその日、いつものように朝５時に目を覚ました。
　この仕事を始めてもう２０年。朝日が昇る前に目覚めるのはもうクセになっている。
「いってきまーす。」
　朝食をとり、畑に向かった。
「今日もいい天気だなぁ！」
　わたしの畑では、たくさんの野菜をつくっている。太陽をいっぱいに浴びた作物たちは鮮やかな色で実においしそうに育っている。
「今年は豊作だな！」

火曜

　今日もいつものように、朝５時に目覚めた。
　いつもと変わらぬ朝だ。
　これからまた、いつもと同じ１日がはじまる。そう思っていた。
　支度をしてさっそく畑に向かう。
「あれ、まだ暗い。」
　この時間ならもう朝日が出てる頃なのに、今日はまだ真っ暗だ。鳥の鳴き声もしない。
「どうしたんだろう。夏なのに…。」

水曜

「あんた、起きて!!」
　いつもは自分がいちばん初めに起きて家族を起こすのに、今日は妻に起こされた。
「今、何時だ？」
　時計を見ると、６時だった。
「なんだろう今日は。いつも寝坊なんてしないのに…。」
　いそいで支度をして、さっそく畑に向かう。
「あれ??」
　まだ外は真っ暗だ。もう７時だというのに。
　畑の作物たちは少し元気がない。

木曜

　今日も妻に起こされた。
　体の調子がどこかおかしいのか？いや、そんなことはない。

「もう７時だ。はやく畑に出ないと！」
支度をして家を出たのが８時。
また朝日が出ていない。
作物たちはどんどん衰えていく。太陽の光浴びる時間が減っているからだ。
「おかしい、なにかが…。」

金曜
今日も起きられなかった。
朝日の昇る時間が遅くなっているから、体内時計もおかしくなっているのだ。
「だから起きられないのか…。」
作物はもうほぼダメになっている。
「なんてこった!!」
その日は、３時間ほどしか太陽が出ていなかった。
この世の中から光が失われてきているのだ。

土曜
もうこの世の中、ほぼ１日真っ暗だ。
作物が育たないどころの騒ぎではない。１日中夜なのだ。
人間も動物も植物も体内時計が狂い、大変なことになっている。
「光がなくなるなんて…。」

日曜
そしてこの世界は光のない世界に。
当然、誰も生きられるわけがない…。

　地球上の大陸を大きく７つに分けると、ユーラシア大陸（アジア・ヨーロッパ）・アフリカ大陸・オーストラリア大陸・南アメリカ大陸・北アメリカ大陸・南極大陸・そして日本である。

月曜日
　朝起きて、私はいつもの習慣で、ニュースを見るためにテレビをつけてみると、オーストラリア大陸が消えたという信じられない映像が飛び込んできた。
しかし、疑う私は眠い目をこすり、もう一度画面を見た。
　「なんと言うことだ･･･」
やはりオーストラリア大陸が消えてしまったのだ。
私は目の前の現実を受け入れられないまま学校へ行くと、今朝のニュースのことで慌しかった。
家に帰り、もう一度テレビを見たが、すべての番組が今朝と同じ内容だった。
私は不思議な感覚のまま布団に入り、そして眠りについた。

火曜日
　朝起きて、私はいつもの習慣で、ニュースを見るためにテレビをつけてみると、
アフリカ大陸が消えたという信じられない映像が飛び込んできた。
しかし、疑う私は眠い目をこすり、もう一度画面を見た。
　「なんと言うことだ･･･」
やはりアフリカ大陸が消えてしまったのだ。
　「あれ、確か昨日も同じようなことが･･･」
私はなんだか怖くなり、学校を休んだ。

水曜日には南アメリカ大陸が...

木曜日には北アメリカ大陸が...

金曜日には南極大陸が...

そして土曜日
　朝起きて、私はいつもの習慣で、ニュースを見るためにテレビをつけてみると、ユーラシア大陸が消えたという信じられない映像が飛び込んできた。
しかし、疑う私は眠い目をこすり、もう一度画面を見た。
　「なんと言うことだ･･･」
やはりユーラシア大陸が消えてしまったのだ。
　「なんだか最近世の中が狭くなった気がするなぁ･･･」

そんなことを私はふと思った。
その日は学校が休みなため、一日中家にいた。
私は時計を見た。
　「もうこんな時間か･･･」
電気を消し、布団に入る。
私はとんでもないことに気づいてしまった。
「オーストラリア大陸、アフリカ大陸、南アメリカ大陸、北アメリカ大陸、南極大陸、ユーラシア大陸イ辰討海箸麓，脇□楯□
すると急に睡魔が襲ってきた。
　「考えずにもう寝よう。おやすみなさい･･･」

そして日曜日の朝が訪れることは決してなかった。

月曜日、いつもと同じ１週間が始まる。携帯のアラームが鳴り眠い眼をこすり布団から出る。普段と何一つ変わらない朝日を背に駅に向かい、いつもと同じ時間の電車に乗る。今週の予定は特にない。いたって普通の１週間。そう手帳で確認しながら電車を乗り継ぎ大学へ行く。地下から抜け出し、携帯のメイルを問い合わせる。大学に着くといつもの仲間と他愛のない会話で時間をつぶす。授業はまじめに受けたり受けなかったり。よくあることだがいつも見る顔がいない。またさぼりだろうと思い、何も気にせずまた授業へと頭を切り替える。そうしているうちに今日の授業も終わる。家に着き、今日のテレビをだらだらと見続けまた１日が終わる。

火曜日も１限なので昨日と同じ時間にアラームが鳴り布団から出る。昨日と同じように電車に乗り大学へと向かう。今日はいつもより混んでいない。気にせずいつもより早く席が空くことだけを考えながら同じ車両に乗る。大学に着き、教室に入ると人が少ない。珍しいなと思いつつも席に座り、いつも通り授業が始まる。お昼になっても今日会う友達は少ないままである。

水曜日は２限からのためいつもより長く寝ていられる。小さな幸せを感じまたいつものように急いで電車に乗り大学へ。必修なのに出席している人は半分ほど。先生は何も言わず授業を始める。指される回数が増える。その後、友達と出席について話すが友達は何も思ってない様子。不思議な感覚を胸に抱きつつ家に帰りテレビをつけるが、テレビは相変わらずである。

木曜日。今日も１限からだ。教室に入って気付く。今週は日を追う毎に人が減っているのだ。電車の中もそうであった。来ていない友達にメイルで聞くも返事は返ってこない。不安になってきた。家に帰っても頭の中はそのことでいっぱいになる。翌朝、昨日のことはすでに忘れていた。しかし今日も授業はある。電車は平日にもかかわらず空いている。２限の授業に出て気付く。やはり大学に来ている人の数が少ない。今日は休日かと思うぐらいだ。駅前も閑散としている。

翌日もまたいつもと同じように目を覚ます。親は朝早くから出掛けたようだ。大学に着くが授業に出ているのは数えるほど。駅の周りは車さえあまり通らない。何かがおかしい。いろんなひとに連絡を取るもつながらない。怖くなり足早に家へと帰るが誰も居ない。次の日になり、ついに街から人気がなくなった。どこの店も空いてない。電車も動いてなければ車も走ってない。

日曜日だというのに人が居ない。車を走らせ都心へ向かう。おかしい。国道に出たのに車が一台も走っていない。あるビルの屋上へ向かう。見下ろしても人

影は見当たらない。きっとみんな自分とは違う世界へ旅立ってしまったんだ。この世界に取り残されたのは自分ひとりなのだ。みんなと同じ世界へ行けなかった私は空を見下ろすビルの屋上で誰にも知られずに目を閉じ終止符を打った。

月曜日、僕はいつもと変わらず朝起きて携帯で時刻を見る。「八時」、遅刻だ、顔を洗いはみがきをして軽く髪を整える。朝食を食べている時間などまったくない。母が毎朝つくってくれている、昨日の夕食の残りが半分と冷凍食品が半分の弁当を急いでカバンに詰め込む、家を出てエレベーターで下まで行き自転車に乗り「八時三十五分」授業五分前に到着、すでにホームルームは終わっており先生のあきれ果てた顔を見る。いつもと何一つ変わらない一日が始まる。

火曜日、朝はいつもとまったく同じように始まる。自転車に乗り、歩いている他の生徒たちを追い抜いていく、いつもと同じメンバーだ。学校の近くにある橋にさしかかると、おそらく今のまま歩くと遅刻するだろうクラスメイトを発見する。二人乗りは禁止だが仕方なく乗せて行く。学校の前にはいつもと同じ体育教師がこわい顔をして立っている。学校の五十メートルほど前で友達を降ろす。またいつもと変わらぬ「八時三十五分」に教室に着き先生のあきれ果てた顔を見る。

水曜日、自転車にまたがり、いつもと同じ道を通る。いつもと同じメンバーたちがいる、軽く挨拶を交わし学校へと向かう、いつもと同じ授業を受ける。昼食はいつもと同じ母のつくった弁当、昼食のあとの四限と五限の授業はいつも睡眠にあてる、放課後は部活のために柔道場に向かう、僕は柔道部だ、部活後シャワーをあび家に帰る。夕食のカレーを食べてテレビをみて眠りに着く。

木曜日、いつもと同じ「八時二十五分」に家を出てマンションの一番隅の駐輪場に置いてある自転車にまたがり学校へと行く、橋の近くまでいくとまたクラスメイトが立っている。またいつものように乗せて行く。放課後、筋肉痛がひどいがいつものように柔道場へと向かっていく。今日は顧問の先生が来ているのでやることは変わらなくてもいつもよりも練習がきつく感じる。

金曜日、学校へと行く道の途中でいつもと同じ顔ぶれをみて安心する。学校に行く途中の顔ぶれも同じ、到着する時間も同じである。今日は校門にいつもいるはずのこわい顔をした体育教師がいない、なぜか不安を感じる。昼食後の四限五限を久しぶりに起きていようとしたが睡魔には勝てずいつものように睡眠。

土曜日、今日もいつものように学校へ向かう、今日も友達を乗せ、校門の前にはこわい顔をした体育教師が立っている、いつもと同じこれでいいのだ。放課後もいつもと同じ練習メニューで部活をやる。いつもと同じ場所でシャ